生育制度

中国の家族と社会

費　孝通　著
横山廣子　訳

東京大学出版会

生育制度

中国の家族と社会

費　孝通　著
横山廣子　訳

東京大学出版会

訳者略歴

1953年　東京に生まれる.
1981年　東京大学大学院社会学研究科修士課程修了.
現　在　東京大学教養学部助手.

主要論文

「文化化過程の段階区分に関する一考察——東南アジア平地民社会において」(『東京大学教養学部人文科学科紀要』第76輯, 1982年)
「儀礼と村落統合」(江淵一公・伊藤亜人編『儀礼と象徴——文化人類学的考察』九州大学出版会, 1983年)

生育制度——中国の家族と社会

1985年3月25日　初　版

[検印廃止]

訳　者　横山廣子(よこやまひろこ)©

発行所　財団法人　東京大学出版会
代 表 者　田中英夫
113 東京都文京区本郷7-3-1 東大構内
電話 (811) 8814・振替東京6-59964

整　版　株式会社永昌美術
印　刷　株式会社平文社
製　本　誠製本株式会社

ISBN4-13-050095-3　　50954

訳者はしがき

本書は、費孝通（フェイシャオトン）教授の『生育制度』（初版一九四七年、商務印書館、再版一九八一年、天津人民出版社・社会学叢書）の全訳、ならびに著者の最近の論文二篇を訳出したものである。ロンドンで社会人類学を学んで帰った若き日の著者が、家族そして社会の問題に真正面から挑んだ野心作である。

本文の冒頭で「社会制度」の定義としてその文章を引用しているマリノフスキーは、費教授が本格的に社会人類学の方法論を用いて研究をまとめ始めた際の師である。しかし、マリノフスキーがどちらかと言えば「個人」に関心を向け、基本的生物的要求をその理論の最終的基盤としていたのに対し、著者は「社会」なくしては「個人」の生存はありえないとして、社会の組織のされ方を分析対象とし、個人と社会との弁証法的関係が本書を貫いている。このように、社会人類学の立場から人類社会の基本問題を論じているが、当然そこには中国の家族・社会の分析がもられており、社会人類学専攻の者ばかりでなく、中国に関心のある人々にとって興味深い問題を提示している。

訳出ならびに費孝通教授自身との接触を通じて私に深い印象を残したのは、著者の物の根底を見て思考する力と、柔軟さゆえの容量の大きさである。費教授は人の命を救えることにひきつけられて大

学の予科は医科に入った。が、革命思想に触れるにつれ、個人の病ではなく万人の病、すなわち社会の病を治療すべきだと考えるようになり、燕京大学の社会学部に進んだ。大学ではアメリカの社会学者パークの講演を聞いたりして、実地に中国社会を研究する方法を求めるようになった。さらに清華大学大学院で社会学と人類学を専攻、とくにシロコゴロフに師事した。最初の実態調査は、妻、王同恵とともに広西大瑤山に赴いたもので、そのテーマは人体計測であった。そこで本人の負傷と妻の事故死という悲劇に見舞われ、傷を治療する期間に、著者は妻の社会組織に関する資料をまとめた。留学に先立って故郷に休養にもどった二カ月間の社会調査資料に基づき、ロンドンで完成したのが *Peasant Life in China* である。著者は生涯の種々の遭遇に対し、常に自己に内在する問題意識まで立ち戻って思考し、敵対ではなく包容して、それぞれを結実させる。このような著者の特質に思い及ぶとき、『生育制度』の持つ普遍性の根源がようやく理解できるかもしれない。費孝通教授は「日本語版への序文」で、限られた時空間内の人の思想の痕跡としてのみ、本書の価値を述べられているが、それとは別に、家族について、婚姻制度について、時の流れを越えて読者に考えさせる力強さを本書は備えていると思う。

本書翻訳の機会を与えてくださり、草稿段階から校正に至るまで原稿に細かく目を通して的確な助言をされ、励ましてくださり、また解説を書いてくださった中根千枝先生に、先ず、心からの感謝を捧げたい。翻訳中には日中の多くの方々のお力添えをいただいたが、特に北京中央民族学院の胡起望先生、索文清先生、中山大学の龔佩華先生、東京都立大学の飯倉照平教授、曽士才氏、慶応義塾大学

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

の桐本東太氏、上智大学の長縄誓子氏、東京外国語大学の中島幹起助教授には大変お世話になった。また東京大学出版会の佐藤修氏は、日本を離れている私に対し、終始、穏やかさと心遣いで出版までの舵とりをしてくださった。ここに記してお礼を申し上げたい。最後に、質問に伺った際、いつもお忙しいのにもかかわらず大きな笑顔で迎えてくださり、一つ一つ御親切に御教示くださった費孝通教授に謹んで感謝の意を表したいと思う。

一九八五年元旦

横山　廣子

日本語版への序文

若い頃の著作が、ほぼ四〇年も経過した後に元通りのまま再版され、そしてまたさらに日本語に翻訳されることは、著者本人にとっては喜びと同時に恥しさを伴わずにいられない。このように長く、また波乱に富んだ歳月を経て、まさか作者自ら、海外にまだ本書を閲読したいという読者がいるのを目のあたりにすることができるなど、自分自身さえ思いもよらぬことであり、喜ばしいかぎりである。しかし、この久しい年月の間に、著者自身の考え方に多少の変化が生じたことも言っておかねばならない。ある部分では少し成熟したかもしれないし、またある部分では逆に時代に追いつくことができずに、明らかに遅れてしまっている。そして老齢に達して、どうしても鋭気はかなり失せており、今は昔に及ばない。青年の可愛さは、「恐いもの知らず」というところにあるのかもしれない。私が本書を執筆し始めた頃を思うと、まだ三〇を少し過ぎたばかりで、抱負を胸一杯にふくらませ、やってみればできるものと思い込んでおり、まだ「三部作」を書こうという志を立てていた。一つは、人々は社会体系中においていかに共同生活を営むか、という内容で、次に、人々は新陳代謝を通じていかに社会体系を維持し、継続させるか、最後に、社会体系自体はまたいかに人々の革新を経て不断に変

化するか、という問題を考えていた。本書『生育制度』は、実のところ、つまりは私の第二部の書きだめしであった。若い頃に自分に定めた目標は、今、この年になって、達成されないと断言することができる。しかしこの点について、かつての自分を全く責めることはできない。主としてこれは、経験を積み、事の難しさを理解するようになったからである。個人はこのように微細な存在である。それでどうして敢えてそのような妄想を実行しようとするだろうか。最近、早期の著作を再読すると、やはりしばしば、たまらなく恥しい気持になる。急所に出会うと、いつも、逡巡したり、後ずさりして、そこを突き抜けて突破することができない自分を発見する。まだ未熟であったということにほかならない。今、駆け出しの頃の著作を日本の研究者の方々のお手許にお届けし、御教示をお願いするにあたり、慚愧の感を覚えずにはいられない。

私が旧著を敢えて再版し、さらに外国語に翻訳して出版しようとするのは、勿論、別の考えがあってのことである。世界の一切の事物は、すべて歴史における一定の時空間の産物であり、同時にその当時のその場所の歴史の一部分を構成すると、私は考える。歴史の一部分である以上、当然、より広い地域とより長い時間において、その他の事物に影響を及ぼすこともありうる。歴史とは、古人が想いを馳せるたびに悲愴感を覚えて涙を流した「悠悠たる流れ」である。著作もその例外ではない。文字のある時代においては、人々は常に文字を用いて、当時の当地の一部の者のものの見方を反映させることができる。それ自身、歴史の産物であるものの見方は、文字を通して社会的作用を持ち、同時に歴史の痕跡を残す。どういう人々の頭と筆を通して反映されるかについては、問題ではない。文章

は一度、手を離れると、実のところ既に作者個人に属さなくなっている。正に、「一言既出、駟馬難追〔一言、口に出したなら、四頭立ての馬車も追いつけない〕」である。なぜなら、それは既に歴史の流れとなり、社会という大海中の一浪になってしまっているからである。このように考えると、四〇年前にまだ若い一人の中国人が持った考え方を反映させた記録を、自分が書いたものだからといって修正して繕う如何なる権利がいったい私にあるだろうか。

旧著の作者としては、本著が書かれた歴史的背景および主観的条件については、その他の読者の方々より、よく理解しているはずであり、特に四〇年の歳月が経過した今、少し離れたところから、さらに少し高い位置から、当時の状況を振り返ることができるはずである。老境から若い当時を見るのも、また味わい深いものである。もし気持と条件が整って一文を書くことができれば、旧著を読まれる方々にとって、本書の内容を理解する際に、あるいは有益であるかもしれない。以上が、私が旧著の再版と外国語での翻訳出版、さらには日本語版への序文の執筆を承諾した理由である。

まず、本著が書かれた経過から述べさせていただきたい。少し古い話から説き起こさねばならない。一九三八年の夏、ヨーロッパで戦火が爆発する前夜、私は *Peasant Life in China* (Routledge, 1939) のゲラ刷りの校正を済ませ、ロンドンを後にしてマルセイユまで行き、汽船で帰国の途についた。当時、アジア大陸では各地で烽火が上がり、故郷は陥落していた。私を国外留学に派遣した清華大学はすでに昆明に移り、北京大学および南開大学と共に西南連合大学を構成していた。私は国事危急の時、

サイゴンから上陸し、まっすぐに昆明に向かった。昆明に到着して、わが母校燕京大学の師、呉文藻教授に巡り会った。呉文藻教授は既に事前に私のために中英文化基金の研究費の申請をしていてくださり、帰国後半月もたたないうちに、昆明付近の禄豊県の農村に赴き、社会調査を開始することになった。その基礎の上に、燕京大学の経済的支援をいただき、雲南大学に小規模な社会学研究室が成立した。一九四三年、私は招請に応じてアメリカに渡り、講義を行った。この一年間を利用して、研究室の仲間たちとの調査の成果を、*Earthbound China*(University of Chicago Press, 1944)と、*China Enters the Machine Age*(Harvard University Press, 1944)の二冊の本に翻訳した。一九四四年に帰国した後、私は雲南大学と西南連合大学にて授業を担当することになった。私は家族問題と農村社会という二つの課目を開講した。戦時の後方の生活は非常に苦しかった。一介の教授の給料では、結婚して子どもの生まれた小家族を養ってはいけなかった。私は原稿を書いて給料の足しにしなければならなかった。大学の教室で一回の講義を終えると、戻って講義原稿を整理して文章にまとめ、新聞社や雑誌に売って発表した。このような境遇から、短文書きを好むという私の習慣が培われ、また当時、多作の研究者という評判を獲得した。

一九四六年の夏、西南大学はそれぞれ元来の場所に戻ることが決まり、清華大学は北平、つまり今の北京に帰ることになった。私は一年中春のような昆明に未練を感じ、その夏休みを利用して、北に帰る前に、その数年来、新聞や雑誌などに発表した文章をテーマごとに分類整理し、何冊かの論文集にまとめる計画をたてた。農村社会に関するものは『郷土中国』に編集され、家族問題に関するもの

は『生育制度』に収められることになった。

本書『生育制度』が難産となることなど予想だにしていなかった。この本の半分の編集が終わったばかりの頃、当時既に昆明を支配していた国民党の反動派は、われわれ「民主的教授」と称される者たちに対し、横暴な迫害を強化してきた。聞一多先生は真っ先にその矢面に立ち、白昼に大学宿舎内の通りで特務機関の銃弾に倒れた。一カ月余りの恐怖の日々を過ごした後、私はついに妻子を連れて昆明を脱出した。この消息を聞きつけたロンドンの友人たちは、いろいろ方法を講じてイギリスに来て気分転換をするよう私を招いてくれた。私は故郷にたどりつき、江蘇省滸墅関に姉が私のために借りてくれた部屋に住み、友人たちが私の出国手続をしてくれるのを待った。私が本書『生育制度』の編集の仕事を完成させたのは、この時期にほかならない。

最初の計画では、本書の最後の部分に親族制度に関する数章をさらに書き足すはずであったが、仮住いで書籍もなく、執筆はかなわず、いい加減なところで終りにせざるをえなかった。これは実に残念なことであり、この場を借りて一筆書き添えておきたい。さらに一言申し上げると、私は一九八二年に滸墅関の最後に本書を書き上げたかつての家を再訪した。私が当時、間借りしていたその部屋はまだあったが、あいにく家主が外出しており、二つの戸は鍵がかけられ、はいることはできなかった。私は仕方なく、その部屋を背景にして一枚の写真をとり、記念にした。今回、日本語版出版にあたり、その写真をここに付し、読者の御要望におこたえしたいと思う。ただ、当時そこに住んで執筆をしていたのは、血気盛んな壮年の学者であったが、現在では写真のように頭髪もめっきり白くなってしま

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

かつて費教授が借家住いをしていた家を背景に撮影(1982年). 教授の頭上の窓のある二階の部屋で1946年に本書『生育制度』の編集が行われた.

った。

本書はただ難産であったというばかりでなく、その境遇もはなはだ厳しいものであった。一九四六年秋、私は原稿を商務印書館に手渡してから、飛行機でロンドンに向かった。捨て子をしたように、私にはその面倒を見るすべがなかった。ゲラ刷りの校閲も最後の推敲もなければ、また戦火は終息しておらず、ふだんは書籍印刷の質の高さで著名なこの書店も、戦時の混乱した状況での出版物は誤植が多かった。私がその初版の見本刷りを手にしてまもなく、全国で解放が行われた。本書の発行部数はきわめて限られたものだった。社会学という学科は大学においては一九五二年から中断し、一九七九年にやっと復活した。本書が埋もれて名も語られなかった三〇年間、著作者との関係から、一九五七年以降、これをお蔵入りにしていた図書館もある。社会学が復活して後、私は片隅に追いやられた書籍の山の中から、この久しく忘れられていた旧著を探し出した。天津人民出版社が「社会学叢書」を出版し、私の著作を要望した。私はこの旧著でその場を取り繕うことにした。出版社がそれを拾ってくれたおかげで一九八一年に再出版され、一九八三年にはまた第二刷が世に出た。

本書の運命はすでに好転したようである。

一九八二年、私は日本国際文化会館の招待で東京を訪問し、文をもって交流すべく、「中国家族構造の変動〔論中国家庭結構的変動〕」と題して講演した〔本書の付論1として収録〕。訪日期間中、私は当時東京大学東洋文化研究所所長であった中根千枝教授にまたお会いした。中根教授と私はもともと、いずれも英国のロンドン・スクール・オブ・エコノミックスでレイモンド・ファース教授(現在は学術上の貢献によってすでにサーの称号を獲得されている)に師事したことのある同じ門下生である。ファース教授は今も御健在である。われわれ同門の弟子の間には二〇年の開きがあり、私は三〇年代にファース教授の授業を聞き、中根教授は五〇年代にファース教授の指導を仰いだ。一九七五年に中日両国が友好の往来を開始した時、中根教授は日本の文化教育界を代表して訪中された。われわれは初対面から古い友人のようであった。中根教授はその日、私に数冊の著作を贈呈され、その中の一冊が英文で書かれた*Japanese Society*(Penguin Books, 1973)であったと記憶している。私はその晩、それを読み終り、翌日、意見を交換した。中根教授は大変善ばれたようであった。その後、私は許真氏にこの本の中国語訳をお願いし、中根教授は「中国語版序文」を書かれ、私自らそれを翻訳した。一九八二年の訪日で私は中根教授に再会し、中根教授はさらに、お忙しいお仕事の中を貴重な数日の時間をさいて、私に同行して仙台の日本農村の見学に来てくださった。誠に深く感謝する次第である。私は訪問中に中根教授に、すでに再出版されていた『生育制度』をお贈りした。投桃報李〔桃を贈ら

れたら、すももでお返しする〕、礼尚往来〔往来を尊ぶのが礼である〕、中根教授は私の旧著を日本語に翻訳して日本で出版することを提案された。私は直ちに承諾し、中根教授は愛弟子の横山廣子さんを翻訳者に選ばれた。横山さんは一九八三年に中央民族学院に留学に来られた際、本書の翻訳原稿を携帯し、その中の訳出困難な部分すべてに関して私本人の解釈を聞かれた。彼女はまた、私のために印刷上のミスをいくつか指摘してくれた。細かい点まで閲読し、真剣に翻訳する彼女のこのような向学精神に私は敬服した。

一九八四年六月、中根千枝教授はまた訪中され、本書のゲラ刷りを持参された。中根教授はすでに自ら校閲されており、本書中で私自身がつくった「社会継替」や「世代参差」などの専門用語に対し、私に口頭でさらに詳しく説明することを要望された。これらの用語は日本の学者にとっては勿論、見慣れないわかりにくいものであろう。しかし、幸いにも日本語は漢字を使い、また日本語には外国語の語彙を吸収する習慣もある。そこで私はそれらの用語を割愛せずに、そのまま訳文中で使ってほしいと希望した。それらの用語が読者にとって目障りになるなら、その責任は当然、私にある。

私はまた、日本語版に私の序文を載せるという東京大学出版会の提案を喜んで承諾した。そして四〇年前に書かれた旧著の後に、ここ数年間に中国の家族構造に関して私が書いた二篇の文章を付け加えることも同意した。一篇は一九八二年に東京においての講演で、これについてはすでに述べた。もう一篇は一九八三年に香港中文大学が主催した「中国文化と現代化」の討論会の席上にて発表した「家族構造の変動における老人の扶養問題」である〔本書の付論2に収録〕。この二篇は、生育制度の若

干の観点に対する私の最近の考えであり、また私が生育制度の観点を応用して中国社会の現実を研究しようとした試みであると言える。

本書『生育制度』を貫いている一つの観点は、人類社会には、個人に生死がある一方、社会は継続していかねばならない矛盾、つまり生物としての個人と社会的集団との間の矛盾を解決する一連の方法が必要であるという観点である。この矛盾は、個体の新陳代謝によって集団の存続が得られることで解決される。社会体系中において、個体の新陳代謝は社会成員の再生産過程を包含している。この過程は単に生物的機能に依存するだけでは完成されず、社会的な養育活動も必要になる。いかなる集団にも、歴史の中で積み上げられてきた、社会的にこの過程を完成させる方法が必ずある。これがつまり、私の言う生育制度である。さまざまな文化におけるこの過程のあり方を私が分析した際、家族という社会的細胞の作用が理解できた。家族の本質は、この基本的矛盾を分析することによってのみ捉えられる。

私がこの過程の本質を分析する場合、現象の発生する順序に従って生物から社会への自然な展開における飛躍を見ていくだけでは、深い理解に到達することはできなかった。そこで「性愛—結婚—家庭—生育」の順序を逆にしてみた。集団の新陳代謝のために社会は新しい成員を再生産する。社会の新成員の再生産には生物的な生殖と社会的養育を経なければならず、新成員の誕生に対しては社会の批准が必要である。また社会の成員を養成するには、なおさら社会的養育は欠くことができない。そ

こで「家」が出現する。男女に家庭を持たせるには社会の定める結婚の手続をとり、さらに社会の定める異性関係に従わなければならない。私が本書において提出した観点は、正に一般の認識の逆を行くものである。

今述べた一般の認識は西洋社会で生まれた可能性が強い。現代の西洋社会においては、個人間の契約がしばしば社会の基礎とみなされる。本書中で提出した「結婚は私事にあらず」という部分は、明らかに現代の西洋人には受け入れがたいところであろう。しかし実際のところ、結婚を本当に男女個人間の契約関係とみなした東洋人はおらず、少なくともわれわれ中国の漢族は、現象の発生する順序、あるいは私の言う本質的順序に対して、かえって妙な議論だと思うかもしれず、また少なくとも若干、奇をてらったものだと感じるかもしれない。善意の評論家もこの種の反応に気づき、私のために弁解してくれた。実際、一体誰が順序を逆にしているかというようなことはどうでもよいのであり、重要なことは、根本的違いの原因が異なる文化の異なる社会観に根ざしているということである。

私は中国文化の中で育ったわけで、現代西洋文化の影響をかなり強く受けてはいても、根本的には、個人は世代をつなぐ鎖にすぎないという中国文化の社会観を決して失っていない。俗諺にある「伝宗接代〔先祖代々を伝えていく〕」は、個人を社会の前に置くのではなくて、社会の中に置くということである。まず社会があって、そして個人が存在する。社会のために個人はあるのである。哲学用語で言うなら、人間と社会との間には弁証法的関係が存しているということになる。社会は多くの個人によって形成されているのであり、人間がいなければ当然、社会も存在しない。社会はそれを形成する

多くの個人のために奉仕するのであり、もし人々が生活していけないような社会ならば、社会もその存在の基盤を失うことになる。しかし多くの個人がいったん、共同生活を営む集団を形成すると、個人を凌駕し、個人を支配する実体が生まれる。これが社会である。社会は人間が創造するものであるが、社会はまた逆に、一人の個人の生活様式を型にはめるものでもあり、生活していこうとする人間は社会を離れることができない。したがって、ヒトが動物であって、かつまた動物でない時代、つまり大自然が生物界から飛躍して人間社会へと発展した時代から、社会は既に、個人がそこで生まれて死ぬ、絶え間なく新陳代謝をする永続的で安定した実体だったのである。社会は、集団内の多くの個人の間の契約的結合によっては成立しえない。

西洋の学者、特にヨーロッパ大陸の学者の中にもこのような社会観を持つ者がいることは知っておかねばならない。そこで西洋の友人の何人かは、西洋の学派によって私の思想を分析した。確かにその多くがきわめて的を射たものであり、また私の勉学の経歴とも符合する。しかし私が自身をいろいろと解剖してみると、私のこの基本的社会観は、西洋の学者の影響というよりは、やはり、幼い頃から私を養い育ててきた中国の土に根ざしていると言った方がよいように思う。私の思想の根本は中国文化を土台にしている。

私のこのような社会観は決して私の創造ではない。それは何億万もの中国人の心の中に存在している。彼らはそれをことばによって言い表わせるとは限らないが、行動によって実践している。この社会観にそぐわないでき事に遭遇すると、彼らは不快に感じ、感情的に許せない。私の香港でのあの

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo